

クマをめぐる「冒険」(中)

「九州に、クマがいる」と「九州の、クマがいる」のあいだで(敬称略)

フリーライター
宗像 充

●むなかた・みつる 1975年生まれ。登山と環境が中心テーマ。カワウソについてのルポを『世界』に、リニア新幹線による南アルプス破壊問題を『岳人』に発表。

「これは電話しようかするまいか迷うちよったんやけど……」

文東恭一が受話器の向こうで一瞬間を置いた。クマの目撃情報の確認のために電話をかけたことだ。

文東は、今年六月にツキノワグマと思われる動物を見かけ、足跡の写真も撮影した。

「おれも見た、つちいう人がほかにも出てきた」

文東の撮影した写真は、七月六日、大分合同新聞で紹介された。その記事を読んだ人から「私が見たのはやっぱり……」という情報が、文東のもとに寄せられるようになった。いずれも文東が三回姿を見たという自宅近くからのものだ。文東が迷ったのは、その中に車を運転中、クマらしい動物とぶつかったという証言

もあつたからだ。

接触した本人へのコンタクトを文東に依頼したところ、断られたという。「いない」はずの動物の目撃情報を証言すれば、騒ぎに巻き込まれることにもなる。

文東の見た動物は、標準的なツキノワグマのサイズからすれば大きいという印象がある。しかし文東は、大分県内のツキノワグマの飼育施設に見学に行き、「そのツキノワグマはけっこう大きかった」と言う。

一般に、「未確認動物」の目撃情報は、「見間違い」として信頼されない傾向にある。しかし、目撃情報や調査はそれ自体の意味だけでなく、マスコミに乗ること、今回のケースのように、新たな情報の発掘につながる。実際、届け先がなければ情報は埋もれる。

ぼくは、今回の環境省のレッドリスト改定で、同じく絶滅とされたカワウソについても取材をした(『世界』二〇一三年六月号)。高知でカワウソ探しをする人は、インターネットで情報を公開するだけでなく、機会があれば地元紙に目撃情報を投書していた。それを読んだ人からまた情報が寄せられる。一方で、証言によって騒ぎになり、生息環境が荒らされると、カワウソを飛ばしてしゃべらない人もいる。要するに、目撃情報のすべてが表に出るわけでもない。

ぼくは基本的に直接聞いた目撃情報は信頼する。たとえ誤認が指摘できるとしても、ウソを言っていない限り、その人にとってはそれが真実なのだ。

どうしたら「絶滅」となるのか

十月五日、大分市のNHKスタジオホールで、日本クマネットワーク(JBN)が主催したシンポジウム「九州のツキノワグマは絶滅したのか？」が開かれた。文東の情報も参考にして、今年JBNが仕掛けたカメラにも、クマの姿は映っていないかった。JBNの山崎晃司は冒頭、九州のクマについて「幻の動物」と触



シンポジウムにて。マイクを握るのが山崎。順番に栗原、足立。右端が著者

れつつも、「一方では極めて確証の高い目撃情報も寄せられました。ふつうシンポジウムというところ、ストーリーがあらかじめありますが、今回は予想がつかません」と語った。それは、やるほどに謎に足を取られる、今回の調査の難しさを示してもいた。

宮崎でクマ探しを続け、JBNの会員でもある栗原智昭は、一枚の画像をスクリーンに映し出した。写真の左隅に頭を下に向けた格好の黒い動物が見える。

「カモシカとは毛並が違う。シシともシカとも違う。サルでもない……」——会場が静まり返った。

森林総合研究所九州支所が実施した、ニホンカモシカの自動撮影調査のカメラが、昨年九月二十一日十二時三十二分に捉えた画像だ。場所は祖母山そぼさん南面の高千穂町側、標高八〇〇メートル付近。安田正俊が研究代表者で、栗原は協力者だ。手前の木の実測から、体高は六〇センチ以上と推計。日本哺乳類学会の九月七日の